

刑事はあはてゝそはくしてゐた。

人々は新吉を犯罪人か狂人かとケゲンそうに見てゐた。

時間は段々夜に向つて進んだ。

でもまだ明るいのだ。

それに仲仕らしい半被を着た男が、提灯を灯けて新吉の前を急がしそうに往復した。

新吉は段々變な氣になつた。

先の刑事は又何處かへ行つて居なくなつた。

上りの汽車が間もなく來た。

新吉は驛員室に這入つて、ストオープンにあたつてまつてゐた。

和服を着た男が新吉のそばへ腰を掛けんとした。

「キサマは刑事だらう、俺のそばへ寄る必要はない」とか新吉は言つた。

ブラットホームに新吉は一人淋しくつゝ立つてゐた。

仲仕が四五人で大きい荷物をドタンバタン手錠で、新吉の足元へ態と轉ばしたり落したりした。